

こちら
子どもスポーツ診療室



スポーツに取り組む10代の子もたちは、身長もぐんぐん伸びる成長期にある。スポーツには、けがが付きものだが、膝や肩、太ももの付け根などの痛みや腫れが長引くようなら、骨や筋肉の腫瘍を疑うことも必要だろう。腫瘍ができるのはまれなケースだが、悪性だと命に関わることもある。徳島大大学院運動機能外科学の西庄俊彦講師に、腫瘍の特徵や治療法について聞いた。



西庄俊彦講師

骨にできる腫瘍を骨腫瘍といい、育ち盛りの10代に発症しやすい骨肉腫は代表的な悪性骨腫瘍だ。一方、筋肉や血管などにできるものを軟部腫瘍という。骨腫瘍は痛みを伴って発症することが多く、軟部腫瘍は痛みのない腫瘍として見つかることが少なくない。これ

悪性には化学療法導入

骨・軟部腫瘍

ら腫瘍の多くは、原因がはっきりと分かっていない。

「腫瘍性疾患の当初の症状はけがや障害と似ており、打撲や炎症と見分けがつかずづらいケースもある」と言う西庄講師。「なかなか症状が取れにくいときには、単純エックス線写真や磁気共鳴画像装置(MRI)で撮影し、確認する必要がある」と指摘する。

腫瘍のうち、骨肉腫やユイソク肉腫、横紋筋肉腫など悪性のものは、身体機能のほか、命までも失う恐れがある。ただ、悪性の骨・軟部腫瘍の発症率は極めて低く、米国のデータでは10万人に2・8人(年間)の割合となっている。

近年は、これら悪性腫瘍に化学療法が導入されて成果を挙げており、子どもは小児科と協力して治療にあたるケースが多い。外科手術で骨を切除した場合でも、人工関節を入れることで発症部位のあ

⑩

る腕や足などを切断せずに、徳島大では空洞部に済むことが少なく、ここに人工骨でできたピンはない。

一方、良性腫瘍は悪性のものよりは発症率が高いが、命に関わる取り組んでいる。

「骨・軟部腫瘍の発症はまれで、痛みが続いても悪性疾患の可能性は低い。心配し過ぎる必要はない」と話す西庄講師。「ただ、通常のけがの経過と異なるケースでは、腫瘍性疾患の場合がある。そのため、病院で早めに精密検査を受けてほしい」と呼び掛けている。

「再発も少なくない。徳島大では空洞部に人工骨を詰め、そこに人工骨でできたピンを挿入するなど、再発を防ぐための治療に



術前

術後1カ月

術後8カ月

10代男性の左大腿(だいたい)骨にできた単発性骨腫瘍の術前、術後のエックス線写真(徳島大提供)

(萬木竜一郎)